

2023年三水会発表テーマ

私のイエス伝

ロバート・オウエンに共鳴して



ニュー・ハーモニーの丘のスクウェア・パレス The New Moral World 計画図 1826

2023年1月18日

野口幹夫

～目次～

序

- 1, 人類の理想「社会主義」の道を開いたオウエンとその後の社会主義の歴史展開
- 2, オウエンの思想を支えたキリスト教原理主義と私のイエス理解の共通点
- 3, 私のイエス伝

序

三水会には協同組合の指導者たちとオウエン協会会長様始め会員の方々が多くおられる。それは自分が知らない領域であったが、お話を聞き、また資料をいただき次第に学ぶことができた。

元来 私は社会主義が人類の将来の展望を開く道であると信じていたが、その発想の端緒を開いたのがオウエンだと知ったことが機会となってこの稿を書くことになった。

特に彼がその道を開拓していく原動力には、彼が独特のイエス信仰の持ち主であったことと その内容が、私の信仰体系と共通するところを見いだせたので、そこに焦点を合わせれば、篤学専門家のおられる三水会でもリポートする意味があるのではないかと考えこの報告書をまとめた。

1、人類の理想「社会主義」の道を開いたオウエンとその後の歴史展開

社会主義思想は、歴史的必然の中で生まれた。市民社会が生まれ、産業革命が起き、資本主義が振興した。そしてその中で労働者の過酷な生き方を見て社会主義の思想が生まれた。

それはさまざまなかたちではあったが、一括していえばキリスト教のもとにあった西欧で生まれた。イスラム国でも、仏教国 ヒンズー国でも生まれなかったことだ。

なぜキリスト教圏なのか。

イエスは教えた。天の国は愛に満ちている、人間は死んで天国に入る。しかし生きている間は、地上に天の国をつくれ。そのための仲間を増やせといった。地上に天の国を作る使命感が社会主義を生み出したのだ。

仏教は人生の苦しみに執着がある、執着心を捨てよ。と説き個人の救済を図った。イスラムはアッラーを唯一の神と信じ、礼拝し、戒律を守り、善行を施すものは、死後清らかな水の流れる緑園に迎え入れられ、清浄無垢の女たちをあてがわれ、そこに永遠に住めるという死後願望が中心だ。

どれも人間の世を良くしていくことは考えもしない。そこに進歩はない。

だからこの世に天国を作る意欲にみちたキリスト教圏だけなのだ。

社会主義への道の開拓は、イギリスで起きた。なぜならそこで産業革命がいち早く起き、資本主義が始まった国だからだ。労働者の悲惨な生活もそこで始まった。

オウエンはその現場に生きた。彼は子供のころからキリスト教の根源に触れていた。才能を生かして資本主義社会の企業活動に成功すると、労働者の境遇改善が必要なことに目を向け、その解決に努力を傾けた。独立したコロニーをつくり、そこで理想を実践できる協同組合や、労働者教育や福祉の形を作ろうとした。一つ一つは小さくとも、そのようなコロニーがあちこちできて、連携すれば社会全体に広まっていくと考えた。理には適っているが、それをつぶしていく資本主義の力は大きかった。

時代は移り、19世紀半ばには、資本主義下の過酷な生活に耐え切れない労働者の反乱が繰り返しフランスで起きた。しかしその反乱は成功しなかったし、しても長続きしなかった。それと共闘する中でイギリスの社会主義者は、キリスト教精神のもとで改革が進むべきだと考え、キリスト教社会主義思想がうまれた。

19世紀 世界は科学技術が席捲し、経済哲学も唯物論が支配的になった。唯物論的に社会経済を歴史の必然と分析し、資本主義の成立を分析し、その結果から資本主義の崩壊とその先に出現する社会主義をとらえたマルクス哲学が生まれた。そして世界の指導的思想となった。社会を変革するためには、この社会科学で理論武装した前衛的指導者たちとその党が率いる必要であるとされた。この社会主義理論を科学的といい、オウエンらの社会主義を空想的と揶揄することもあったが、実はそのマルクスはオウエンの80歳の誕生記念集会に参加しているので、マルクス主義の根本にオウエン主義があることをマルクス自身は評価していたのである。

資本主義による生産力の増大が、社会主義への通り道として必要であったが、その条件がまだできていない未熟国家のロシアや中国が、前衛指導者の存在だけで社会主義を目指した。当然おきる失敗を犯して人民は苦勞をした。

資本主義が確立していて、生産力が充実していた西欧の先進国で、かつ社会主義理念に燃えた強力な指導者の条件もそろった国がある。ナチスドイツである。ナチスとは「国家社会主義」の略である。しかし無残な悲劇に終わった。国家社会主義は、民族のエゴを謳歌し、その軍事力で社会主義を実現できるとした理念は間違えていた。キリスト教の教える全人類への博愛主義が全く欠けていたのだ。

農民革命が先行し社会主義をめざす中国は、いま一見社会主義とは矛盾する国家資本主義の段階を必要プロセスとして実行しているが、中国共産党は、実態はともかく理念としては科学的な「社会主義国家の建設」を目指している唯一の大国家となった。党の指

導理念に従わない民衆は弾圧される。天安門事件があり、香港の弾圧がある。新疆ウイグル地区のイスラム民衆はその宗教を捨てるまで自由を奪われることになる。これらは理念実現のための必要悪だが、悲惨で耐えがたい。

20世紀 科学技術は急速に進展し、マイクロは量子論からマクロは宇宙全体の把握まで、すべてを人間が科学で解明できたと信じてきたところまできた。人類を滅ぼせるほどの兵器原爆も手に入れた。地球の隅々まで支配は及んだが、逆にその地球を破壊する汚染を広めた。

しかし21世紀、科学技術の戦端を行く宇宙観測科学が、人間の奢った自信を打ち砕いた。高らかに成功したはずの人間科学は、実は宇宙のわずか4%の物質の解明をしたにすぎず、宇宙には科学の手が出ない96%の未知の物質が充満していることがわかった。20世紀では科学で発見できないものとして、その存在を否定された「人間の精神」もその未知の物質で構成されているとみることによって否定できなくなった。

科学万能 科学信仰の時代は終わった。「神と人間精神」の復興時代である。科学的であることを誇った唯物論的社会主義の不完全さが公然の下にさらされた。

そうしてオウエンの再評価の時代が来たのだ。

そして今、それは「グローバルな社会的連帯経済」運動へと発展しつつある。これまで社会主義は資本主義の崩壊とともにそれと入れ替わるものとみなされていたので、激しい社会闘争を伴うと見られてきた。しかしこの「社会的連帯経済」運動は資本主義と共存し、行き詰まる資本主義グローバリズムが露呈する様々の欠陥を補完するシステムとして発展しそうである。資本主義の生産性向上力は残し、人類の生存のための共通富の生産向上には生かしていく。そしてその欠陥である環境破壊を防ぐために課さねばならぬ脱成長は、副産物として失業の増加を生むが、「社会的連帯経済」はそれを補完するとともに、労働からの人間疎外の回復をももたらせてくれるのだ。

その中身はオウエン主義を引き継いでいる。

2、オウエンの思想を支えたキリスト教原理主義と私のイエス理解の共通点

ロバート・オウエンの宗教については、誤解が付きまとっている。彼の理念の理解を求めようとした講演の中の言葉をとらえて「聖書も否定する無神論者」と批判された。

彼の描いた理想のコロニーはこの報告の表紙の絵に描かれている通り、その中心に参加する民衆が協同生活をする建物があり、労働は生産協同組合、生活は消費共同組合で人間らしい労働と生活が保障されている。

驚くべきことに、そのコロニーの中心に教育機関が置かれたのだ。そしてその教育理念こそ オウエン思想の中核になる「人間の性格の環境決定原理」なのだ。確かにこれまでと違う参加型の社会を築くためには、ふさわしい人間教育が必要だといわれてその当然さに気がつく。新中国でも労働の英雄を主人公にした映画や演劇が盛んにおこなわれ、文化大革命も人間の改造を目指していたのだが、人々の恐怖の中で強制的な圧力のなかで進められた。

オウエンの教育理論に注目しよう。彼はアメリカ大統領を前にした演説でこう述べている。

人間はこの世に存在をもたらす根源的な力によって形成されている。

しかし生まれて後 周りの環境の影響を受けて育つ。

したがって純粋で真実の宗教を人間に理解させ実践させるようにする。

「それは人間同士のあらゆるつながりにおいて、その思想・言動・行動が、常に慈善・博愛・親切の本質を踏まえて実践する。」ことに尽きる。

この宗教は特定の時代や国家のものでなく万人共通の宗教である。名付けるとすれば合理宗教である。

この宗教の実践が全人類のあやまちと悪から救済し、利己主義を打破し、社会主義制度を創設し、全人類の最大の幸福と平和を保障する。

ここに彼の教育理念と、合わせて彼が信奉する「合理的宗教」の本質が短く語られている。まず「人間存在をもたらす根源的な力」と表現する如く、イエスの父なる宇宙根源の神にさかのぼる信仰である。その宇宙根源の父の求めるものは一言でいって「愛」である。そしてその「愛」は祈りや宗教行事ではなく、社会的な実践である。

オウエンはイエスキリストが父のメッセージとして伝えた「愛」の実践をする人間の形成をすべての社会主義の基本に置いたのだ。その意外な着眼に彼の宗教的意識の徹底した高さを思わずにはいられない。

その観点からすれば、彼が、当時イギリスはじめ西欧に深い影響を与えていたキリスト教各派を批判するしかなかった。既存のキリスト教会はすべて、教会の宗教行事に従う

ことが第1優先である。信仰の力を社会改革に向けるなどとんでもない異端だった。また聖書に関していえば、その神聖視を打破する必要があった。15世紀のルターの宗教改革はカトリックの権力と富による支配を否定したが、その時によりどころにしたのが「聖書のみ」であってそれが聖書の神格化を生み。聖書は神の言葉であって、すべて絶対の真実とした。今も米国西南部のキリスト教原理主義者は、旧約の神の人間創造神話を信じ進化論を拒絶する。

しかし聖書は、まず旧約聖書はイスラエルの民族神の神話でしかなく偏狭である。新約聖書もイエスの言葉そのものではなく、その弟子たちの不完全な伝えである。

彼の姿勢「その根源に迫る」理解のためにはまずその絶対視から解放されなければならなかった。彼が当時「聖書も否定する無神論者」という批判が、いかに誤りであるかが理解できるであろう。彼はイエスを派遣された根源の父の存在に強いゆるぎない信仰を持っていたのである。

その信念は宇宙的な存在につながり、彼の晩年の心霊交流につながっていくのである。話は少しさかのぼるが1844年アメリカでJD デイビスという男によって、霊界にある著名な死者との対話で得たという驚異的な文書が公表されて以来、さらに別なところでも霊界との交流がモールス信号のようなテーブルタッピングで実現できたことから、一挙にスピリチュアリズム・霊界コンタクトが流行し始めた。

そのアメリカボストンから叩音霊媒のハイデン女史がその手法紹介のため1852年ロンドンを訪れた。オウエンは彼の宗教的信念から、スピリチュアリズムに強い関心を持ち、早速ロンドン訪問の彼女と交流した。そして最初に霊界の父母を呼び出しに成功、そのメッセージの確からしさで、死者の霊との対話に確信を持った。1853年彼の82歳の時のことである。

彼の70歳後半は彼の共同組合運動の停滞が明らかになり、現世の運動に失意を抱いていたが、この霊界の人々からの暖かい支援メッセージを受け、新たな境地に達したと確信する。そしてスピリチュアリズムこそ人類の新たな精神革命となると確信する。それを実践探求することが、亡くなる87歳までの彼の最後の仕事であった。

それから30年後の1882年に英国の心霊研究協会 SPR が設立され、フランスの哲学者でノーベル文学賞受賞のアンリ・ベルグソンがその16代会長に押されたのが50年後の1913年のことだから、オウエンのスピリチュアリズム探索の先駆性がわかる。人類の叡智の進展は、この分野ではいまだに遅々としているが、人類に残された最大の関心事で

あり続けていることは間違いない。

この彼の最後の仕事となったスピリチュアリズムの業績はさまざまなオウエンの研究書にはあまり触れられていない。現代にいたるまでスピリチュアリズム自体が評価されていないためだと思うが、残念なことである。おそらくそれがそれにふさわしい位置付けがされる時代になれば、オウエンがその領域での輝かしい先駆者であったとして新たな脚光を浴びるようになるであろう。

話は変わるが、私は父母の死を機に、仏教に興味をもって、仏教各派の教えを訪ねて回った。最後に原始仏教である釈迦の教えにたどり着いた。それは魂の救済にたどり着ける道ではあったが、所詮自己の魂の救済であると気づいた。そして50歳の時カトリックに帰依した。以来30年イエスの言葉を、それを知らない人々に伝える講座を毎年開き、伝えるとともに自身の信仰を深めていくことができた。ここ2～3年これまでは触れることを避けていたイエスの父の存在に正面から向き合っていくことになった。それが次に紹介する「私のイエス伝」である。

そして今、それがオウエンの宗教意識に近いのではないかと思うようになった。

社会主義は人類の夢である。またスピリチュアリズムの探求もまた夢の一つである。

そしてその二つは、オウエンが切り開いた道であると理解した。

その運動に参加していきたい。

3、私のイエス伝

IA プロローグ 広大な宇宙の中の人間存在

1 人間は宇宙全体の中でどんな存在なのか。銀河星雲の端にある太陽系惑星・地球の上で30億年かけて生命の進化の頂点に達した存在だ。

2 そのような存在を生み出した原動力は何か。20世紀の前半に活躍したフランスの哲学者ベルグソンは、宇宙の始まりから発し今も展開している「純粋な意識であるいのちの波動」「エランビタール」がそれを生み出したと考えた。

『いのちの宇宙の発生はすべて一挙になされたものではない、活動的な持続が存在し、創造と成長が一つのものなる。宇宙は出来上がったものではなく絶えず作られるものだ。宇宙はおそらく、新しい世界をつぎつぎに加えながら無限に成長しているのだ。

わが惑星の表面では、進化する生命は物質に結び付けられている。もし「いのち」が純粋な意識、まして超意識であったならば、「いのち」は純粋な創造的活動であり続けるだろう。実際には生命は一つの有機体に釘付けされており、この有機体は生命を無機的な物質の一般的法則に服従させる。けれども「いのち」はあたかもかかる法則から自己を解放するために全力をつくしているかのようなのである。』

3 21世紀には宇宙物理学が進んで、その知見から宇宙の成り立ちを決めている宇宙常数群は、人間を生み出せるよう精密に調整されていて、それには「宇宙意思」が存在し、それが人間に至る生命の進化の原動力になったという説を展開している物理学者が多数おられる。

4 しかしそれらの仮説を、科学的に検証することは不可能である。理由は二つある。第1に先の哲学者ベルグソンが言うように、科学の手法は、物事を分解して分析する手法なので、動的で繰り返しの無い かつ分解すると崩壊する「いのち」を解明することに適さない。

第2に、21世紀の宇宙物理学がその存在を発見したダークマター・ダークエネルギーは宇宙には充満しているが、それは電磁気を帯びていないので、検出の方法を人間は持たっていないのだ。そのダークマター・ダークエネルギーで

「宇宙意思」も「人間の精神」も形成されているとみられるので、今の科学では解明できない世界なのだ。

I B プロローグ B 不完全さを露呈した人間

この神秘に満ちた「宇宙意思」も「人間の精神」の世界も、今の科学では解明できないとすれば、歴史的事実に沿い、合理的な直感の哲学で推論をする以外ない。以下に私の直感をご紹介します。

1. **まず宇宙をスタートさせ人間まで進化させた「いのちの波動」は「宇宙の意思」を持っていた。**
1世紀に書かれたヨハネの福音書には、いみじくもこう書かれている。
「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。ことばのなかにいのちがあった。いのちは人間を照らす光であった。」 まさにここに想像した内容を端的に表現しているのだ。
その言葉を借りて「宇宙意思」を持つ「いのちの波動」を「神」とよぼう。
2. その原動力によって地球上のいのちは進化し、長い時間をかけて、ようやく知性を持つ生物である人間を生み出すところまできた。そして人間は自分たちを生み出した宇宙を理解できるところまできた。
3. 「宇宙意思」は、そこまで成長した人間に、初めて自分の成分と同じ「精神」を持たせた。人間だけが精神を得たことは進化論の道からはありえないような飛躍だ。「宇宙意思」なる神は生み出した人間を頼もしく思い、この宇宙の完成のために力を貸す仲間になると期待した。なぜなら人間は物質的存在として経験を蓄え、そしてその肉体の死後に豊かになった精神となって宇宙世界の建設に参加してくるからだ。
4. 人間一人一人に与えられた「精神」は「神」の萌芽を内蔵しているが、幼い間は人間はそれと知ることはない。徐々に成長するにつれ、気づかされる機会を得たら、それと気づき、生涯をかけてそれを成熟させることを目指すようになる。それによって「宇宙意思」の期待に応える存在となると予想した。
5. しかしせっかく「精神」を与えた人間は「宇宙意思」が期待したような存在に至らない大きな欠陥があった。それは人間の「エゴ」の強さだ。

6. むろん、いのちを持つものはすべて、自分のいのちを守るための「エゴ」を本質的に身に備えていた。人間もその点は同じだ。特に人間のエゴは、他の生き物と違って、知性を武器に技術を生み、それを道具とできるため巨大な影響力を発揮するようになった。地球規模で影響を与えるほどになったし、人間の殺戮能力も飛躍的に高まった。
7. 「精神」はその「エゴ」を抑制するために与えられていた。確かに個々の人間はその通り、精神がエゴを抑制ができるが、問題は組織的な人間集団となると、そこに精神の抑圧作用は及ばないのだ。集団の「エゴ」が際限なく また効果的に組織的に発揮される。戦争で殺戮し奪い合うまでになった！ そして地球の資源を浪費しつつにはそれを破壊するところまで行きそうになった。元来「宇宙意思」は唯一無二の存在であるので、集団となると様変わりとなるようなことは予想しなかったのである。
8. 「宇宙意思」は人間集団を指導し変革する必要があることを悟った。かつては恐竜全盛時代に恐竜たちが植物を全滅させる形勢になったので、これを止めるために、宇宙意思は、地球に巨大隕石をぶっつけ全滅させた。はびこり過ぎた醜い人間を大洪水で絶やし善良なノアの1家だけを残した。しかし思うようにはならなかった。
9. とはいえ、ここまで成長した人間集団に「宇宙意思」が外部から介入して直接変革作用を与えることはもはや困難であり、人間自体が自覚して自分で努力させる外ないとみた。
10. その方法は、人間の姿をした指導者を人間世界に送り込み、人間集団に新しい倫理を教え、その集団から徐々に地球上の隅々まで広めていき、進化した人間集団を完成させるしかないとみた。
11. 「宇宙意思」は、地上の人間たちの姿をよく観察し、むつかしいプロジェクトを立ち上げた。大ドラマが始まるのである。
12. 以下にそのドラマを「私のイエス伝」として語りたい。

II 発端となった時と場所

- 1 「宇宙意思」は人間集団改造のプロジェクトを開始する時と場所を慎重にさがした。地球には東に秦帝国 西にローマ帝国という人間集団のまとまりができた時代を

選んだ。スタートのポイントはその二つの中間点を選んだ。ここから東西に拡散し全地球に広まりやすい場所であった。

2 世界に広まった人間集団は、どの集団も例外なく、その集団社会をトラブルなく結末できるように部族ごとの神話を創り、わからないなりに自分たちを作り出した神たちや霊界を想像し尊重していた。「宇宙意思」は、それをほほえましくみていた。

3 ユダヤの民は知的に進んでいたもので、その神意識も特別進んでいた。唯一神ヤーウエに助けられてイスラエルの国を作ったという神話を信じ、神の意思にそう厳しい戒律も立てていた。その時代はローマ帝国の支配下であり、民はいつか「救世主キリスト」が現れるとの特殊な信仰も持っていた。それはよかったが、その神話に問題があった。ユダヤの民は特別に選ばれた民であり、神はそれを邪魔する他の民は容赦なく殺す神とされていたことだ。戒律も人間を縛り過ぎていた。

人間が集団となると特別に強まる「エゴ」を問題とした「宇宙意思」としては、ユダヤの神話は どうしても変革したい民族神だった。かつ救い主の来臨を待ちわびている。この民をターゲットとして選んだのは当然であった。 時代と場所はかくて決まった。

III 派遣

1 ミッションを成功させるためには、派遣する使者は人間の形をとり、かつ人間集団にスムーズに溶け込みつつ、かつ注目を集めなければならない。いきなり大人とすれば、よそ者として排除されるので、やはり赤ちゃんからスタートさせる必要があった。一人でなく正副二人の赤ちゃんを派遣する計画とした。一人は本割の使者としもう一人は引き立て役だ。

2 本割の赤ちゃんを産む女性一人は未婚だった。引き立て役の赤ちゃんをひき受けたのは既婚の女性だった。ふたりは親戚同士だった。両母さん役の女性には事情を理解させて承知の上の妊娠だった。二人の母が出会ったときは、胎内の子らは動き合い、無言の連絡を取り合った。月満ちてマリアはイエスを、エリザベトはヨハネを出産した。

IV 成長と活動の準備

1 二人は生まれた時から、ただならない歓迎をうけたが、二人とも、普通の子供としてすくすくと育った。子供の時は、お互い別なところで関係なく大きくなった。

母マリアは、我が子を特別な事情の中で生まれたと承知していたが、なるべく特別なことが起きないようにふるまって、イエス本人にもその事情を告げることはせず、一切を胸に秘めてじっと見守った。ヨハネは成長して、親もとを離れ都会を離れ。荒れ野に若者を集め、独自の修行集団を作り始めていた。

2 当時ユダヤ社会はローマ帝国の支配下であって、民衆は苦しい生活をしいられていた。彼らの神話では、このような状況下では、きっと神からの救いをもたらす「預言者」か「救い主」が現れるとの期待を持っていた。独特の洗礼儀式で存在感を持っていたヨハネ集団のリーダーヨハネもその「預言者」か「救世主」と期待され、人々が押し寄せた。そのことを聞き及んだイエスはヨハネのもとを訪ねてきた。

3 ヨハネは喜び、初めてのミッションを実行した。すなわち、ヨハネ集団に入る洗礼を受けたいというイエスを押しとどめ、声高らかに「この方こそ神から派遣された救世主である」と宣言したのだ。そして華やかに洗礼をして見せた。そればかりか自分の集団に参加していた優秀な若者を選んでイエスの弟子としたのだ。ヨハネ集団に続きイエス集団がスタートできた。

4 イエスは、この荒れ野で40日の修行をした。この時それまでなるべく普通の子であろうとしていた状態から「宇宙意思」から派遣された使者として高い次元の能力を顕在化する準備をしたのだ。我々が知りえぬ強い治癒力などを身に着け、病や不具の身体機能の修復さらには死からの蘇りまで行える能力を準備した。

V、イエス活動の開始

1 イエスはガリラヤを活動の拠点と選んだ。イスラエルのなかでエルサレムを中心とするユダヤ地方が中心で、ガリラヤは貧しく混血が多く軽んじられている地方だった。イエスは虐げられている土地を選んだのだ。ヨハネ集団から引き連れた若者を連れ、漁師や収税人など身分の低い者たちを加えて、イエス集団をまず作り上げた。そして第一声を上げた。「時は来た。わたしと共に新しい神の国は始まった。悔改めて、私が伝える神のメッセージを聞きなさい」と宣言したのだ。

2 不思議なうわさが広まった、最近カファルナウムに拠点を置いたイエスという人は病気を癒すとのうわさだ。当時この社会は病んでいた。様々な病は。すべて悪霊にとりつかれてなるものとされていた。イエスは高次元の能力を持って悪霊を追い出し病や不具の身体機能の修復、さらには死からの蘇りまでやって見せた。たちまちその

拠点は人であふれるようになり、イエスは説教をする時間がないほどの人気となった。

VI、イエスのメッセージ

1 イエスのメッセージは体系的ではない。彼は書き残さなかった。しかし印象的であった。なぜなら、彼はたとえ話を使い、民衆には身につまされる話に聞こえた。しかし教養あるパリサイ派の連中や祭司連には、かえってわかりにくい話であった。彼が警戒されるのを避けた戦術上の配慮であった。

2 例えば有名な山上の垂訓を見てみよう。

マタイ福音書（5－1）には

心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人のものである。

悲しむ人々は幸いである。その人たちは慰められる

柔和な人々は幸いである。その人は地を受け継ぐ

義に飢え乾く人々は幸いである。その人々は満たされる

憐れみ深い人々は幸いである、その人たちは憐れみを受ける

ルカによる福音書（6－20）には

貧しい人々は幸いである。神の国はあなた方のものである。

今飢えている人々は幸いである、あなた方は満たされる。

今泣いている人々は幸いである。あなた方は笑うようにうなる。

<中略>

今富んでいるあなた方は不幸である。あなた方はもう慰めを受けている

今満腹している人々は不幸である。あなた方は飢えるようになる

3 有名な山上の垂訓であるが、第1行から この二つの福音書は違っているが、それぞれに違うイエスのメッセージを伝えている。ルカの「貧しい人が幸いで、富んでいる人は不幸だ」とは、直接に一つのメッセージ「富に目を向けるなという」を言いあらわしている。当時のユダヤ社会には、富は神の祝福とされていたから、豊かな人々には受け入れがたいメッセージだったろう。それでマタイは「心の」を付け加え、別なメッセージに変えてしまった。「富んでいる人は不幸だ」は記録さえしていない。しかし「心の貧しい人は幸い」は、「心すなわち精神が常に渇き、そして神を求める状態こそ幸い」という全く別なメッセージを表すことになり、それはそれで重要なメッセージとなっている。

4、このように彼の福音メッセージは分散していて、どれもそのままではわかりにくいので、全体を意識しながら、順序だてて彼のメッセージのエッセンスを3つの見方に整理して、その内容をみよう。

① 人間存在に対するメッセージ

人間は生物の中で初めて精神を与えられた存在だ。霊的存在であることを認識しなさい。精神の中心に愛を置きなさい。敵をも愛しなさい

物質的な欲望にとらえられてはいけない。お金を目的としてはいけない。

集団の中では支配する権力者はあってはならない、皆仕え合うのだ。

② 「宇宙意思」なる神が存在する天について

宇宙は愛に満ちている世界だ。愛に満ち溢れた父がおられる。父に反抗した子供も反省して立ち戻れば、罰せられず歓迎される。

神の国は天にあるばかりではない。この地上にも神の国の状態は実現しなければならない。それを作るのはあなた方の役目だ。

③ 人間と宇宙神との関係について。

人間はその肉体の死を迎えるとき、その精神は天に迎えられ、永遠のいのちに生きる。宇宙を豊かにする仲間である。この世でも、聖霊の声は人間の精神に届く、祈りの中で聴く耳を持つ人には、いつでも聞こえる。(これは19世紀にはじまるスピリチュアリズムの新展開につながっていく。)

VII イエス活動の展開 1

山上の垂訓の例のようにイエスのメッセージはイエス集団の人たちにもなかなか理解されなかった。これまでの社会通念とは大きな落差があったからだ。さらにこのイエス集団にどうしても理解させなければならぬことは、イエスが伝えるメッセージが宇宙意思なる神からのもので、絶対的なものであると信じさせることだった。人間が持ついろいろな意見の一つとして相対的に受け止められたら失敗であった。イエスは「自分の言葉は父である神の言葉だ」と繰り返し語っているが、それを信じさせるためには自分が特別な存在「救世主」キリストと信じさせなければならない。そのためあるときは、イエス集団のリーダにだけ、自分を神の姿に変容して見せたこともある。それでもあまりに不思議なこと故に理解されなかった。この運動がこの先どうなるのかが心配だった。しかもイエスはこの先で自分は殺されるというのだ。それを聞いた集団のリーダのペテロですら、イエスに「そんなことは言わないで下さい」とた

しなめようとした。彼らは神の栄光のもとに力ある集団となり、自分たちもその栄えある集団の一員として社会的に高い地位になれると期待していたのである。それに気が付いたイエスは強く叱責したエピソードが残っている。

一方でこんなエピソードもある。

2 サマリアという部落があった。ユダヤと共通の先祖だったがアッシリアに占領されて混血が進んだ地方でユダヤ人から軽蔑されていた。イエスは根拠地からユダヤの首都エルサレムに向かう時この地を通り過ぎることがあった。その井戸端で一人のサマリアの女に出会う。普通は避ける相手だがイエスは親しく声をかけ、女は驚く。強い印象に残る会話の中で、女がこの人がただ人ではないと気が付き、つらい境遇の中でいつか救い主が現れるとの望みを持っていると女が告白すると、イエスは「それは私だ」と驚愕の言葉を吐く。サマリアの女は一瞬のうちに不思議と驚きながらも、それを疑わず、部落に戻って「救世主を見た」と告げまわり、皆を連れてきて皆もそれを信じるというエピソードが書かれている。イエス集団でもそれはまだ半信半疑なのに、疎外された部族の疎外された女だからこそ単純に信じてしまうという、不思議なエピソードだ。

VIII イエス活動の展開 2

1 イエスの福音伝達が困難であった特別な理由があった。ユダヤの民は歴史上たびたび神の言葉を伝える預言者が救世主が現れると信じていた。しかしヤーウエの神は天におられる唯一の神で、その「神の子」といった人間が神殿以外のところから突然現れるということは、祭司ら宗教当局に到底認められず、それを語るイエスは見つければ直ちに殺される運命あった。しかしイエスは自分が神の子であると示さなければ、メッセージの権威を人間は受け入れない。まず仲間のイエス集団にはそれを伝えたが、いつも外部に漏らすなど厳しく口止めした。そのイエス集団にも、このイエスが神の子キリストであるとの確信を持たせることには成功していない。そのような限界状況の中で、彼はミッションの見切りをつけるほかなかった。すなわち死を覚悟して公に宣言するしかなかった

2 その死の決心さえすれば、今度は人間の姿、その身体、処分を効果的にしなければならぬ。それを覚悟してユダヤ人の最大の祭り「過ぎ越祭」の行われる都エルサレムに入った。まず境内に出ている両替商や供物の動物を売っている店をひっくり返して彼流の「宮清め」を行った。この売店街は、神殿の経営になくはならぬもの

だったので一挙に険しくなる。しかし神官たちも彼の大人気を見てその場で彼を逮捕取り押さえることはできなかった。

そこで夜 人々が寝静まった後 ひそかに逮捕したのだ。そして十字架につけ処刑した。人間の目からはみじめな失敗であった。せつかく作り上げたイエス集団の面々は自分たちが逮捕されるのを恐れ逃げた。イエスの亡骸を墓に収めたのはイエス集団の仲間ではなかった。殺されても「3日目に復活する」と弟子たちには繰り返し語ったのだが、そのようなことは 空想的なこととして、誰も信じなかった。

3 しかし、父からの派遣の成果は ここで一挙に固まるのである。「十字架につけられ殺されたキリスト」 後世にまで伝わるこんな効果のあるシンボルはない。しかも イエスは処刑されて3日目に その復活した姿を、恐れて隠れていた弟子たちに見せた時、ミッションは完成したのだ。イエス集団はようやく「イエスは神の子であった」と確信したのである。

IX イエス集団の活動 1

1 イエスの宣教は成功していたのである。イエス集団は、イエスが行っていたすべての言葉を信じるようになり、さらに改めて「私の言葉を伝えよ」と励まされて、はじけるように確信に満ちた活動を開始したのだ。むろんユダヤ教当局の監視下で地下活動的に始めたのだ。

2 そんなイエス集団は困窮した民衆には魅力的だったので集団は大きくなっていった。この集団の生活はエンゲルスが原始共産制と名付けたように財産を持ち寄りお互いの生活を支えあった。イエスの教えた「互に愛し合いなさい。許し合いなさい」を実践し、穏やかな人間の集団であった。戒律に縛られ窮屈なうえに過酷な収奪にあえていた人々には、心安らかに生きられる避難所的集団であった。イエス集団は速いスピードで広まっていった。

3、 イエス集団は大きくなり飛躍した。仲間内で宣教と管理の役割を分担し、教会となる組織を作るところまできた。また有力な使徒は自分の根拠地を持ちそれぞれに集団をつくり宣教を開始した。

X イエス集団の活動 2

1 そんな時代のある時 エルサレムからは遠く離れた田舎町で あるイエス集団の秘密集会があることを監視当局が察知し 弾圧の部隊を差し向けた。その隊のリー

ダはサウロという裕福で若い知識人だった。彼が馬に乗って現地に向かっていく時、突然イエスが姿を現し声をかけられたのに驚き落馬した。そのショックで目が見えなくなった。彼はそのショックから立ち直ったとき、熱心なイエス崇拜者になった。名前もパウロと名乗った。彼はローマ市民権をもってローマ語もギリシャ語も話せた。初期のイエス集団にはいなかった人材であった。そんな彼の活動は大きかった。トルコ一帯からギリシャまで同調者を広めていった。その成功の後、彼はまた弾圧の続くユダヤ地方に姿を現し、わざと逮捕させてローマに身柄を移送させた。世界の首都ローマでイエスのことを宣教するためのはかりごとであった。彼の働きでローマ帝国の首都ローマでも残酷な弾圧にもめげずイエス集団が広がっていった。

2 皇帝ネロはイエス集団の拡大に恐れ、自作の放火事件を起こしてそれをイエス集団の仕業とでっち上げて一斉に殺戮した。イエス集団の有力な幹部は捕まり殺された。にもかかわらずイエス集団の浸透拡大は抑えられなかった。

3 そしてついにその時が来た。ローマ帝国皇帝が自らの帝位獲得のためにイエス集団と手を結ぶところまでに勢力が拡大したのだ。ローマ帝国の公認の宗教キリスト教となった。その勢力圏である今の欧州全土に広まった。また見込み通りインドから東の中国漢の帝国までも伝播した。

光の宗教「景教」と呼ばれ漢の都に大きな寺院を作るところまで行った。こののち仏教に大きな影響を与えた。

この間の成果はイエスのことを書いた書物がたくさん出たことである。のちの時代整理されて「聖書」として後の世に伝えられた。

XI 権力化と形骸化

ローマ帝国の国教となったキリスト教は、その版図である全欧州やアフリカ地中海沿岸に広まっていった。国家権力と教会が協力して進んだこの布教範囲の拡大はキリスト教のゆるぎなき基盤となった。

この時代 富と権力を背景とした教会は、豊かな富がもたらした余裕の下で、人間の芸術を花開かせた。建築に音楽、美術、文学 演劇などすべての分野でキリスト教の信仰を芸術として表現し、豊かな人間精神資産を生み出した。

この間、精神的深化を求めた純粹の祈りの信仰は人里離れたところを活動の場にした修道院で受け継がれ独自の信仰形態を深めた。

XII 繰り返すイエス運動の復活と宇宙意思への立ち返り

このような権力と富に支えられたキリスト教会の状況は、イエスのメッセージに沿ったものではないと、正しく批判する運動がおきた。世界各地でそして何度もイエスに戻れという運動が起きたのだ。プラハの広場にその銅像があるヤンフスもその一人である。しかし焼き殺され、どれも成功しなかった。

しかしついに16世紀にカトリックの神父ルターが起こした反逆はローマ支配に對抗する世俗君主の応援も得て、ついにキリスト教会の分裂に成功しプロテスタント教会を作った。いわゆる宗教改革だ。

カトリック教会はその後自己保身を図るが、力を失い、民族国家運動には逆らえず、ついにヨーロッパ全土の支配権を失い、公園のようなヴァチカン国に縮小する。「神は死んだ」とニーチェがのべたもこのときである。無神論者が多数となった。

しかしこの危機こそキリスト教運動にイエスのメッセージに戻るチャンスを与えた。20世紀から21世紀にかけて、ようやくイエスにもどれ運動はカトリック総本山であるヴァチカンに及び、教会刷新運動が展開されたのである。1964年から3年かけて行われた教会刷新の公会議や、1999年の教皇メッセージでカトリックは過去の誤りを告白して神と人類にわびた。ようやく純粹のイエス運動に戻ったのだ。

21世紀には時のローマ教皇フランシスコは、地球環境の破戒と、人間生活の破戒に直面している危機を脱却するため、全人類が靈的存在に立ち戻るよう呼びかけた。全人類がイエスの呼びかけにこたえて歩み始めること以外、この地球と人類の危機の脱却はできない。

そしてその道こそ人間本来の次なる進化を遂げることができるのだ。

ついに人間は宇宙意思が望むように動き出した。それが、はるかに遠い道のりであろうともだ。

参考文献

① ロバート・オウエンから社会連帯経済までに関して

- 中川雄一郎著 ロバート・オウエンと現代-協同組合運動を通して- 2019-1 三水会
鈴木岳著 ロバート・オウエンとオウエン主義者たちの輪郭 生協総研レポート No97
2022-3
中川雄一郎著 ウイリアム・キングとラドローの協同組合思想 同上
上田千秋著 オウエンとニュー・ハーモニー ミネルヴァ書房 1984-2
丸山茂樹著 共生と共感の世界を創る 社会評論社 2017-10
富沢賢治著 労働者協同組合を学ぶ 2021-1 三水会

② 宇宙意思に関して

- ディーパック・チョプラ他著 宇宙はすべてあなたに味方する-You are the Universe
2017-10 フォレスト出版
桜井邦明著 なぜ宇宙は人類をつくったのか
最先端の現代物理学が解明した「宇宙の意思」H20/12 祥伝社
三田一郎著 科学者はなぜ神を信じるのか 講談社ブルーバックス 2018-6

③ イエスに関して 4つの福音書以外の参考文献

- ルナン著 イエス伝 岩波文庫 1941-1
ラーゲルレーヴ著 キリスト伝説集 岩波文庫 1955/12
シュヴァイツェル著 イエスの生涯 岩波文庫 1957-12
モーリヤック著 イエスの生涯 新潮文庫 s 27-10
遠藤周作著 イエスの生涯 新潮文庫 s 57-5
遠藤周作著 キリストの誕生 新潮文庫 s 57-12
山形孝夫著 治癒神イエスの誕生 ちくま学芸文庫 2010-8
八木誠一著 イエスと現代 NHK ブックス s 52-2
高尾利数著 イエスとは誰か NHK ブックス 1996-3
若松英輔著 イエス伝 中央公論社 2015-12

④ スピリチュアリズムに関して

稲垣直樹著 ヴィクトル・ユーゴと降霊術 1993-3

津城寛文 <霊>の探求.

アーネスト・トンプソン著 近代スピリチュアリズム百年史 1848-1948 星雲社 2011-2

三浦清宏著 近代スピリチュアリズムの歴史 講談社 2008-4

トニー・オッセン編 シルバーバーチのスピリチュアル・メッセージ H5-6 ハート出版
H5-6

⑤ カトリックの刷新と現代の状況。

第2バチカン公会議・公文書全集 1986-7 中央出版社

特に 1965-12-7 発行の現代世界憲章

教皇フランシスコ 「回勅ラウダード・シ」 2015

「回勅兄弟の皆さん」 2020